
ぶあつい本が読みたいっ

がらんどう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぶあつい本が読みたいっ

【Nコード】

N2131T

【作者名】

がらんどろ

【あらすじ】

犬塚美影は昼休みの一幕でクラスメイトの成瀬辰巳と言葉を交わす。

成瀬の事が気になる美影だったが、その一番のきっかけは彼が「小説書き」であることだった。

物書きさん達が惹かれ合うボーイミーツガール in 学園。

あなたが読みたいお話はどんなお話？

ふむ、これはボーイミーツガールという奴では？

昼休み。

夏休み明けの学校の、いたる所から声があふれ出ていた。

校舎から、校庭から、部室から、教室から。

いぬづかみかけ犬塚美影が口にした一言もそんな喧騒の中の一つ。

他愛もない言葉として、繋がる誰かの声に消され……るはずだった。

「成瀬つてさあ」

ぼそつと口にしてから後悔した。

昼休みに女子同士で集まってご飯を食べながら話す時間は、多分学校に居る時間の中で一番盛り上がる。

昨日のテレビは見た？あのドラマを見逃した！新しいCDが出ただけだ。えとせとら、えとせとら。

そんな中でクラスの男子の名前を無意識につぶやくとか。しくじったと彼女が思うより早く食いつかれる。

「なにミカ、気になんの？」

こういう時は焦るな、焦ったら骨までしゃぶられるだけだと美影は自分に言い聞かせる。

「いや、なんかバツグすつごい重そうじゃん？」

なに入れてんだろうねー、と繋ぐと周りも話題に乗り始める。

美影が口にしたのはクラスメイトの男子、成瀬辰巳なるせたつみの事だった。

友達が多いが遊びまわっているわけでもない。成績も良いが、ガリ勉君でもない。

化粧つ気があるわけでもないが、そこそこ顔も良い。

みんながみんな、好き勝手な事を言いあい、お互いが相槌を打ち合う。

知ってるレベルは揃いも揃って同じで、それは美影も他の少女も変

わらなかつた。

女の子の中で盛り上がる話題は『共通』のネタだ。

そういう意味で、美影がリードしたかった通りに女の子達は盛り上がる。

「マジメそうだよな」という声がある。

誰かが「フーかキマジメすぎ」と言う。

「頭いいんだよねー」という声もあがる。

反応して「でも塾とか通ってないんよな」と塾通いしてる子が言う。

適当に話を合わせながら、上手く話が流れた事に安堵していたが、今まで聞いたことの無い話が出てきた。

「でもさあ、成瀬って授業サボってたりするよ〜?」

「あれ? そうだったけ?」

「うん。選択で取ってる方の授業はけっこーサボってたよな」

全員が異口同音に意外だと言っていると、本人が教室に戻ってきた。片手には辞書みたいに分厚い本を持っていて、席に着くと重そうなバッグに本を入れた。

昨今は高校生にもなれば電子辞書を皆持っているし、わざわざ紙の辞書を使っている生徒は少ないが、居ないわけでもない。

隣のクラスから返してもらったか? と思ったら同じような本を取り出す。

「……………えっ、辞書が何冊も入ってたんの?」

「つて、今あたし、声に出さなかつたか! ?」

思わず口を押さえるが、今度こそ手遅れだ。

運が悪い事に、美影が叫んだのはクラスの大半が成瀬の本に視線を向けている一瞬だった。

成瀬が振り返り、美影の事を見る。

クラスメイトとはいえ、今まで話した事がないのに随分な態度だ、と美影は反省する。

成瀬が女子になれなれしく話している所など見た覚えがない。どうフォローしたものかと短い時間で逡巡している間に、フォローの手は成瀬の方から差し出された。

「いや、さすがに辞書じゃなくて小説だよ？厚さはかわないけど」美影を含めた女子一同はやや驚きながらも成瀬に対する評価を加点する。

今まで話したことが無いにも関わらず、にこやかに笑いながら切り返す。

女子にビビっている男子には出来ない反応だ。

本が好きな根暗っぽい男子（失礼）の大半と同じで、オドオド話しかけて会話も続かないかと思いきや、少しイメージが変わる。

「とうるかさ、さすがに辞書読んでたらヘンタイだつて！」

美影が返事もせず思ってる間に成瀬の前の席の男子が会話に混ぜてくる。

クラスのバカ代表、野球部の猿渡で、いつも女子の会話に割り込もうとしてきてるやつだ。

ちなみに野球はドのつく下手くそである。

「辞書でも小説でも、こんなぶあつつい本読めねーよ。だつてほら、教科書4冊分くらいあるし！」

「おめーは辞書くらい使え！つーか次ヤマティーの英語じゃねえか！おめーがいつも答えらんないから俺に回ってくんだぞ、たまにはやれよな！」

教室全体から笑い声が聞こえてくる中、ヤマティーこと山崎がやってきて、女子も席を戻し始める。

男子の中だけのムードメーカーかと思っていたが、そうでもないらしい。

何人かが美影と同じことを思ったようで「初めて話したけど、ちょっと意外だったねー」と言っているのが彼女の耳にはいる。

夏休み直前、クラスメイトの意外な一面を発見。
ふむ、これはボーイミーツガールという奴では？
顔も嫌いじゃないしなー、などと勝手な事を考えて1人によい
していた美影だが、開いたノートの白紙を見て自分も予習をしてい
ないことを思い出す頃には、妄想は頭から追い出されていた。

ふむ、これはボーイミーツガールという奴では？（後書き）

なんとなくの流れは既にあるので、第一目標はちよこちよこ直しながら最後まで続けること。
がんばるぞー。

つぎはぎだらけのMC2=E

9月。美影は2学期の選択授業で、担当教師とそりの合わない生物を避け、数えるほどしか女子のいない物理を選択していた。

周囲に知り合いはほとんど居なかったが、同じクラスの男子の一人の中に成瀬が居た事だけは最初に気付いた。

そのクラスの中でも成瀬は小僧たらしいくらいに優等生だった。

テストでは高得点だし、課題を忘れてたりもしない。そのうえ同級生に勉強を教えるくらいの余裕もある（ちなみに先生よりもわかりやすいと評判だ）。

周りから一目置かれるくらいに優秀な成瀬は嫌でも目に付いたが、突然授業をサボる彼を見て、夏休み前の会話を思い出す事もしばしばあった。

そして分厚い辞書のような本を読んでいる姿も何度か見かけていた。前回の会話（アレを会話と呼んで良いのかどうか……）から一度も話すことなく半月が過ぎたが、“クラスメイトの男子”から“成瀬個人”に彼のイメージがランクアップしている事は自分でも気付いている。

接点もなく、話しかける程でもない程度ではあったが、その変化は彼女にとって心地の悪くなる物ではなかった。

だけど、彼との接点は思わぬところに潜んでいた。

家が3件隣の幼馴染、深森裕子みもり ゆうこの部屋でいつも通りくつろいでいるときに成瀬の話題を出すと「部活が同じなんだよ」と返ってきた。

「部活って、、、文芸部？」

「うん。去年、一年の時のクラスが同じで、部活も一緒だったんだよ」

裕子の所属する文芸部には私も一時期入っていたし、部員とも結構仲が良かった覚えがあったが、美影の記憶に成瀬は影も形もなかった。

た。

驚いた？と笑う裕子に、美影はコクコクと首を縦に振る。

言っちゃ悪いが（偏見なのは承知の上で）文芸部なんてほぼその手のオタクの集まりだ。

世の中オタクでカツコイイ男子だってたくさん居るだろうけれど、そうとは見えないクラスメイト（しかも男子というのは中々に貴重ではないだろうか）が幼馴染の親友と知人だったというのは、盲点というか驚きポイント満点というか。

分かりやすい美影の考えを見透かした裕子が「ちなみに成瀬くんはサブカルにはそこまで詳しくないから、安心してね」と笑う。

安心してなんだ、安心して。

「それはおいといて、じゃあ成瀬君がサボり常習犯なのも知ってるんだ？」

「うん、得意な授業ほどサボってたかな。大学には行かないから、平均的にできれば満足だって言ってた」

平均的にテストで80点台取れるなら確かに満足だろ。思わず「あんにやるう」と口から漏れる。

多少ムツとして美影が黙っていても、裕子は成瀬の事をとつとつと話していく。

そのほとんどがクラスメイトと何度も交わしたありふれた内容と同じだが、一つだけ違った話が出てきた。

「成瀬君もボクと同じ文芸部んだけどねえ、ちょっとコレ読んでみてよ」

そう言って本棚から出してきたのは文芸部が校内で出している文芸誌だ。

隔月で出しているそれは部員のそれぞれの作品が載っている。

本人達曰く、

「この程度のもん出してドウジン活動の隠れ蓑に出来るんだから、楽だよなー」

などと言っていたが、はて、何の事だか。
渡された冊子の目次の中。

裕子が指をさしているのはペンネームが山猫という人物の作品だ（ちなみに本名で出してきたので女子達が勝手に改変したらしい）。ページ数は17（文芸誌としてはやや多い）。

タイトルは「MC2"E」。

なんだっけこれ、物理でやった気がする。

「まあちよつと読んでみてよ」

彼女にしては意地の悪そうな笑顔が気になったものの、勧められるままに文字を追い始める。

裕子は飲み物を取ってくるね、と言って静かに部屋を出ていった。

美影が読み終わる時間の倍ほどを見積もって裕子が部屋に戻ってくると、美影がベッドの上につつぶせに倒れていた。

「ねえ、ユウ」

「ん、なあにみいちゃん」

コップを二つ載せた盆をテーブルの上に置くと、美影は手にとって一息に飲み干し、

「ねえ、なんなのこれ。ぜんっぜんわかんないんだけど！！！」

勢いよくコップをテーブルにたたきつける。幸いコップはプラスチック製だ。

どうやら、わざと時間をおいて戻って来たり、美影が好きなオレンジのジュースとクッキーを出したりしたのもわざとらしい。

「だよねえ」

と苦笑して裕子は美影の隣に腰をおろした。

「だよねえ、じゃないって。ユウが帰ってくるまでに3回くらい読んだけど、ぜんっぜん意味不明！これって続き物じゃないよね？」

裕子が床に目をやると前後2回分ずつの部誌が散乱していた。

納得がいかない表情の美影は、うなりながら裕子の膝の上に移動してクッキーをもそもそと餌付けされる。

「……なんとなく歯切れが悪いくせに、お話の流れだけはあるんだよね。」

なのに話の進み方が妙に飛び飛びで不自然。でも文章の書き方は読みやすいのよ。

こんなチグハグってあり？」

今度は足の上で頭をゴロゴロを転がし始める。ちよつとつとおしいので頭の上に文芸誌を4冊ほど乗つけると、下からつぶれた猫のような声がした。

まったく。ほんとに調子だけはいいんだから。そう思っても習慣でついつい美影の髪をなでしてしまう。

ほんとに、調子が良くなって直感だけなのに、

「美影はいつもするどいよねえ。伊達に読書家じゃないっていつか私に気になるところは、いつも気付けてくれる。」

嬉しくなつて髪を撫でる手つきを優しくする。

褒められた美影は声のトーンを落としてぐずぐずと反論する。

「読書家って言えるほど読んでないよー、自分の好きな物だけしか読まないしー」

つていうか本どけてよー、との抗議も含めてさらりと流し、裕子は一番上の本を開く。

美影に最初に読ませたその話は、言葉を話す帽子と一緒に、無くした言葉を探しに行く小説だった。

設定も悪くないと思う。

文章の書き方もやや漢字が多かったり、難しい言葉遣いだが、小説を書くこととする男の子なんて大抵がそんなものだ。そこはさほど気にならない。

「でもみいちゃんは、ほんとにするどいと思うよ。」

裕子がハッキリとそう言えるのは、この物語を成瀬がどう作ったのか知っているからだ。

「実はね、これって最初に書いたお話を、三分の一くらい切り詰めたらしいんだよ」

はあ！？、と美影の上半身がバネ仕掛けの人形のように跳ね起きる。
「三分の一！？こんだけムツカシイ言葉つかって、文字だらけの話を、三分の二に！縮めたのか！」

やっぱアイツ馬鹿だーっ、と美影が脱力して膝の上に戻ってくる。成瀬から始めてその話を聞いたとき、自分も同じ反応をしたので、美影をオーバーリアクションだとなじる事も出来ない。

美影は横になったまま、器用にコップからジュースを飲み始める。だらしないのに周りを汚くしないのでそのまま好きにさせる。

「そんなに話を削っちゃったらさ、手直しかかそういうレベルじゃないじゃん。お話としてなりたないじゃん。」

私の生きてきた17年の三分の一を削ったら私になんないよ」「文句を言いながら、改めて部誌を開いて読み直している。

裕子にとって美影の一番可愛いところは、こういう他人が聞いたら恥ずかしい事でもさらっと言つてのける事だ。

本人に言つてやらないのは優しさ半分独占欲半分だったが、言っている事にはいつも概ね賛成できる。

「ほんとその通りだよねえ。確かにこれはやりすぎだと思うんだけど……」

はつきりしないもどかしい裕子の返事に、美影は体を回して彼女を見上げる。

「成瀬くんはね、自然に書いてるとどんどん長くなっちゃうんだって。でも彼が書きたいのは短くって、満足できるお話らしいんだ」なんか隠してる気がするなーと感じたけれど、そもそも他人からまた聞きしているのにこれ以上つつくのは図々しい。

そう思った美影は、成瀬の作風を評価するだけにする。

「まあ、そういう小説もあるけどさ。これじゃ本末転倒でしょ。」

長くたって面白いお話はあるし、長いから面白い小説だってあるってこのバカに教えてあげてよ」

「うん、前にまったく同じ事を言った。その時にオススメのぶあつとい小説を教えてあげただけだね」

それでも成瀬は部室や図書室の短い本を積み上げては崩しつつ、厚い本は勧めた本だけ「良かった」と一言感想を言うだけだったという。

「ちよつと残念だね。もし成瀬くんが書きたいことを全部書き出せたんなら」

裕子がその先を言わなくても、美影には分かった。

いままでも何百冊と同じ本を読んで、語り合ってきた。

言葉にはしない思いが、期待になる。

そして二人とも、手に取った本をそつとたたんで

「こんなツギハギされた奴より面白そうって、思っただけどな」

「だよねえ」

でも、設定だけ凄い量の資料集みたいなの作ってくるかも、なんてちよつとだけ抱いた期待はそのまま続いた他愛ない会話の中に消えていく。

そこからはいつも通り、本好き同士の会話を続けて夜が更けていくのだった。

才姫様抱ツコとキニナルアイツ

走ってる間、他の人はどんな事を考えているんだろう。

その日の体育の授業は長距離走だった。

走り始めはいつも余計な事ばかりを考えてしまう。

午後一番の体育はお腹がつかないとか、陸上部員なら頭の中でタイムを数えてるんだろうか、とか。

体が熱くなってくると、次第に頭の中は走る事だけを考えるようになっていく。

400メートルの平均的なトラック。校庭に二つ並んだその一つをぐるぐる回るのが今日の体育の課題だ。

自分の体を受ける風を感じ、走る事にのめりこんでいく。

呼吸のタイミング、足で土をける感触、熱くなってくる体、体を冷やす風。

集中し始めると、それらを意識する事はなくなって、今度は全く関係のない事を考え始める。

目線を正面からそらすと横を走っている裕子がだんだんと後ろに引き離されていった。

あー、そうだよなー、空気抵抗でかいもんなー。ちくしょう、軽量型で凹凸の少ないボディがウラメシイ。

気持ちいつもより胸を反らして顔を上げると、ちょうどコーナーに差し掛かるところで、もう一つのトラックを同じクラスの男子が走っているのが目に入る。

(男子も、今日は長距離走か)。

こっちが隣のクラスの女子と一緒に授業を受けるのと同じで、男子も隣のクラスの男子と一組になって体育を受けている。

女子のトラックは全員がバラバラになり満遍なくトラック全体に広

がっているが、男子は3つの集団に分かれていた。
一つは先頭集団。

運動部で得点を稼がんと張り切っている集団だ。
体育の得点と見学している女子の得点とどっちが欲しいのか分らないが、先頭を行く我がクラスのバカ代表猿渡が見学している女子に手を振っていた（全員無視しているのによくもまあやるもんだ）。
最後尾は文化部系の男子達。

話しながら走る奴もいるし、必死に走ってなんとか追いついているのもいる。

手を抜いている余裕がカツコイイと思ってるのかこちらをチラチラ見ているけど、丸分かりだ。

中腹を走るのは手を抜いている運動部と、運動部でもないのに中々の速度で走っている文化部系男子だ。

理屈でモノを考える美影には、運動部に入ってる人の手抜きは気にならない。

放課後から日が暮れても死ぬほど走らされるのを考えれば、体力を温存しておきたい気持ちは分かる。

そんな集団の中で彼女の視線が止まったのは、彼らに離されないように走っている成瀬だった。

陸上部の男子と軽く笑いながら並走していく彼は、なかなか辛そうな顔をしていた。

そういえばあの男子と成瀬は出身が同中だったか。
仲が良さそうな様子に納得しつつも意地張って必死すぎだ。

けれど、飄々とやることだけこなしていくイメージが強かった成瀬だが、真剣な表情は初めて見た。

美影の中では裕子の話を聞いて成瀬の情報が一つ増えた形になったが、他の女子の中では相変わらず成瀬のキャラ付けは定まらない。

すぐに他人に格を付けて分かった振りをしたがる女子学生という生き物には、物珍しい対象だ。

逆にその物珍しさから、彼と特別に親しくなりたいという女子は居なかったが、美影の中ではそうでもなくなってきた。

それは中学の時に彼女が体験した初恋などとは違うものだ。

擲掬されるのは嫌いだけれど、廊下の先に姿を見つけて目で追ってしまう程度には気を引かれていた。

きっかけは間違いなくこの前のユウとの会話だ。

分厚い小説大いに結構。1000ページもある本を読破した瞬間の達成感最高！

成瀬がそこまでのものを書くとはもちろん思っていないが、本人としてはそこそこの量を書き上げた事があるはずだ。

そこに満足を感じた事がないなんて、なんてもつたいない。

私を感じられなかったそれを、むぎむぎ放棄した結果があ作品。私には分からない事。

だから、聞いてみたい。

「犬塚さん！」

呼び止められた声に振返ってみれば、ゴールラインを割っていた。

考え事に集中してゴールしても走り続けるなんて、私はいつのまに進研 ミのキャラクターみたいになったんだ。

息も整わないうちにぼやきながら歩いていると、遅れて裕子がゴールする所だった。

声をかけようとして様子がおかしいのに気付く。

顔は蒼白で、調子が悪いのは一目瞭然だった。

「ちよ、ちょっとユウ!? どうしたの!？」

「あはは……. 実はその、走ってる間に…….」

手で押さえているのは下腹。

走っているときに痛む脇腹の下ではなく、下腹部を押さえてた。ツイてない、と後から笑って済ませられる話だが、

「……………つけてる？」

美影の質問に黙って首を横に振ると座り込んでしまう。

まずい、どうする。

とりあえず先生に言っ、て、教室までは……………大変だから保健室か。どうやって？

おぶっていくのは、姿勢がまずい。

でも走ってたせいで凄く辛そうだし。

もともとユウはきつくて歩くのさえ辛くなる子だ。

クラスの女子が集まり始めて、男子もこちらを窺っている。

「……………深森、どうしたの？」

声をかけてきたのは、成瀬だった。

走り終わって歩いていったのか、まだ息が荒い彼の口調は思わず竦く《んでしまうくらい鋭かった。

美影の返事も自然と緊張して鋭いものになってしまう。

「あっち行って、大丈夫だから」

成瀬の表情が強張っていくのを見て、しまったと心の中で思う。

そんな彼女を無視して、成瀬は顔を下げたままの裕子に話しかける。「深森、歩けないんだな？」

イラツときた。無視か。いや、そんなこと考えてる場合じゃないだろ私。

美影が返事をしない内に、裕子は黙って首を縦に振った。

裕子の顔からは運動の熱なんて消えていて、傍目にも辛いのが分かる。

これはもう私が連れてくしかない。

そう意気込んだ所で成瀬に肩をつつかれた。

「なに!？」

「保健室、俺が連れてくから。そっちとこっちの担任に報告ヨロシク。それが終わったら手伝いに来て」

はあ?と口から漏れる。

問い詰める前に成瀬は座り込んだ裕子の膝と背中の下に手を滑り込ませて抱え上げる。

その瞬間、校庭の全員の動きが止まった。

いやいやいや。何ヲヤツテルンデスカ成瀬サン!?

「……いやあ、これは恥ずかしいね」

「小説のいいネタになるんじゃないか？」

「自分がお姫様抱っこされたのを使うなんて恥ずかしすぎるよ……

……」

そんな事を言っている場合じゃないだろう。

驚いてツッコミすら出てこない私を置いて成瀬は歩き出す。

あと、お願い。

コクコクと頷くだけの私を残して、成瀬は校舎の中へと消えていった。

成瀬たちの姿が見えなくなると途端に騒がしくなる。

後ろで女子がキャーキャー喚いているし、男子も「うおおおお」と盛り上がっている。

「っ!! ああ、もう!」

強く地面を蹴り飛ばす。

そりゃあ裕子は助かったかもしない。

でもこれじゃこの後どうなるか分かったもんじゃないっつーの！！
よくよく落ち着いて考えれば、高校生にもなつて今更生理で騒がれるか？

どちらかという今回のお姫様抱っこのほうが尾を引きそうだ。

「~~~~！ムカツク！」

美影はイライラを抑える事無く、体育教師に報告と保健室に行く許可をもらった。

ついでに男子の教師にも報告しておく。

(とりあえず一旦教室に戻らなきゃな)

やる事を決めると、美影は駆け足で校舎に入つていった。

一難去つてまた一難とはこの事だろうかと頭を抱える。

はあ、どうやって周りを静めようかな……。

いかり ときどき あせり

美影の予想通り、成瀬のお姫様抱っこは結構な噂になっていた。だがそれはいくつかの幸運が重なって、美影の心配したほど長引かなかった。

「二人が付き合ってるんじゃないか」という噂が、当日の間に風のように広がったのもつかの間、裕子は翌日登校すると周囲の視線がある中で普通に成瀬に近寄り、

「成瀬くん、きのうはありがとうー」

いつもの調子で話しかけ、礼の袋を渡した。

成瀬がそれを開けると中にはかなりの量のクッキーが入っていて、

「俺、甘いのがあんまり得意じゃないんだけど……」

「じゃあ男子皆で食べるのはどうかな？」

なんて会話をして、裕子は自分の教室に戻り、成瀬は群がる男子どもに女子の手作りクッキーというエサを与える仕事に入った。

ちなみにクッキーはきっちり美影のクラスの女子の分まであり、美影は自分の気に入っている裕子のクッキーを全員が遠慮なく消化していくのを恨めしげに見ていた。

幸運、というよりはお互いの行動にそつが無かったと言うべきでもあるが、ともかく学生にありがちな軽くて後を引くような噂は立たなかった。

「……………」

美影は頬杖をついて窓の外を見上げ、ため息をつく。

裕子が注目的になることを心配していたものの、実際に悶着を起さずに一件落着かせてしまったのだから手どころか口を出す暇さえなかった。

（文句じゃないんだけど……）

金曜の午後でただでさえ身が入らないというのに、今日は自習だっ

た。

窓側最後尾という最高のポジションのおかげで、ノートが真っ白のまま外を眺めていても誰にも気付かれない。

教室の中を見回してみると、何人か姿が見えない。

課題の提出もないので他の教師に見つかりさえしなければとエスケープする生徒ももちろん出てくる。

そして、自習とか関係なくいつも通りエスケープしてる奴が1人居るなど美影は気付く。

いまさらながらに思い返してみると、彼に対する反応が邪険すぎたんじゃないかと悩む。

友達でもなかった相手にあんな反応をされれば、マイナスなイメージをもつだろう。

気にはなっていただけに、想像は疲れるし落ち込みもする。

まあ問題も解決したし、今更どうしようもないかなー。そんな風に諦めかけたときにふと思いつく（というかどうして忘れていられたのか）。

あれ、私、謝ってない……？

焦る。

校庭ではツンケンした態度だったし、保健室で入れ替わる時も頭下げただけでほとんど無視した。気がする。

いやいやいや、これはもう気になるとかそついった浮ついた事考えてる場合じゃない。

謝らないと……ユウに頼んで仲介してもらおうかな。自分でも珍しく弱気でそんなずるい事を考えてしまう。

やっぱり自分で謝ろう、と思い直す。

いったんそうと決めると、今の時間がピッタリじゃないかと思えてきた。

そもそも、事の原因が土日をはさんでまで掘り返す話題ではない。だが実際に謝りにいこうにも、成瀬がいつもどこに消えているかは全くもって不明だ。

窓から部室棟の文芸部の部屋をしてみるが、カーテン全開の部屋は無人だった。

どこにいるのかなあ、なんて思わず呟きながら顔を上げなおすと「……えっ？」

いた。成瀬だ。

だが居る場所がおかしい。

成瀬を発見したのは図書室の窓ではなく、その更にも。屋上だった。しかもその縁に座^{へり}って本を読んでいる。

（あんな目立つところで何やってんだろ）

彼らの学校の屋上は開閉厳禁で南京錠が二つほどかかっていたはずなのだが、美影は成瀬がどうやって屋上に上がったかを考えるのはやめた。

タイミングとか時の運は本当にあると思っているし、だったら動いたもの勝ちだ。

美影は自然を装って席を立ち、教室を抜け出した。

いかり ときどき あせり（後書き）

若干短いですが、次が長いので区切りました。
どうぞそのまま次へ進んでいただければ幸いです。

結んで、開いて

吹き抜けの渡り廊下を避けて2階の職員室の前を通り過ぎ、階段を上って図書室の前も通り過ぎたらそこは屋上へ出るための重い鉄扉があるだけだ。

予想通り、南京錠は二つとも外されていて、それでいて触ってみないと分からないようになっていて、思わずため息をつく。ずる賢さに呆れると同時に、機転が効くともいえるかな。

音を立てないよう、美影が静かにドアを開けるとそこには成瀬の背中があつた。

すれ違いにならなかつたことにほっとしていると成瀬がこちらに振り返る。

一瞬、驚いた顔をした成瀬は一度教室の方を見下ろしてから、今度は体ごと振り向いた。

「犬塚さんがさぼりなんて珍しいね」

言葉にトゲは無い。

とりあえず普通に話せそうだという事に安心する。

「自分がサボつてばかりなのは反省しないんだ？」

ああ、自習とはいえサボつちゃったな。そんな罪悪感からついませつかえした返事をしてしまう。

「僕は高校出たら就職するから卒業さえ出来ればそれでいいかな」

偏差値的にはそこそことはいえ、進学校の生徒が高卒でしかも夏休み明けに就職先が決まっているというのはかなり珍しい。

だから私が思わず「就職!？」と声に出して驚いたとしてもなんらおかしくはない。はず。

はっと冷静になって美影は後ろ手に扉を閉める。

そのの所を詳しく聞きたいという衝動にかられながらも、その前に今日は言わなくちゃいけない事があると思ひ直した。

何を言ってもごちゃごちゃと言ひ返されそうので、美影は前置きもな

く「ごめん！」と頭を下げた。

「こないだは、ごめんね。なんか焦ってて、キツイこと言っちゃって。

やり方はどうなのって思ったりもするけど、やっぱり成瀬がいたからユウもアタシも助かったし。

お礼も言えてなくて、その、ありがとう」

一息に言いきって、だけどどんな顔をされているか不安で頭は上げられなかった。

成瀬からの返事はなく、他に言い足りない事は無いが、言い方がおかしかったかと不安になる。

そろそろと視線を上げて成瀬を見て見れば、彼は声を殺して笑っていた。

「……なんで笑ってんのっ!？」

「いや、謝りながら感謝されたからどう答えたものかと思って……うん、どういたしまして」

ごめんね、と笑った事を謝られるが、美影からしてみれば全く面白くない。

「謝ったほうは、無視するんだ？」

半目になった美影に迫られて成瀬はまあまあとなだめる。

「謝るのは僕の方だと思ってたから。でしゃばってごめん。」

女の子の事は女の子に任せただけが良いと思っただけで、顔見知り が苦しそうなのをほっとくのもいだけないだろ」

少し照れた様にはにかみながら、成瀬は頬をかく。

お姫様抱っこなんてして恥ずかしくないわけがないが、なら今度は どうしてそんな事を躊躇もせずやってのけたのが気になった。

「ね、どうしてあんな目立つことしたの？」

少し迷うようなそぶりを見せてから、成瀬は美影の横に座り込んで口を開いた。

「深森がアレだってわかったら、男子の中でも騒がれる」

まあそれはあるかもしれない。普通の女子だったら、そんなこと知られたくない。特に同じ年の無神経な男子になど、分かれてたまるかとも美影は思う。

だがそれは普段の授業中に抜けたりする時だって同じだ。小学生でもないのだし、共学で高校生にもなればそこまで繊細に隠し立てもしない。

男子にだって知識はあるし、子供のようにバカ騒ぎはしないが、分かるものは分かって身を引くものだ。と、考えているのが顔に出ていたらしい。

そしてどうやらそれは女子がそう思っている（というか思い込みた）だけのようなだった。

「この前里中が同じように休んだら成瀬が歯切れも悪く話を続ける。」

里中は同じクラスの女子だ。確かに彼女は先週の体育を見学していた。

「そうね、それが？」

「この前アイツの彼氏がそれを男子の中でネタにして、さんざ盛り上がった」

「はあ！？なにそれ!？」

思わず声を荒げて成瀬に「静かに」と注意される。

いや、確かにこの前の体育では里中がやたら男子の視線を注がれていて、女子の中でも「やらしーねー」とか言っていた気がする。

だがそれは里中が自他共に認めるくらいカワイイからで、いつもの事だと皆で笑いあってもいた。

それがまあ、よもや不出来を通り越した彼氏によってお粗末にも恥を晒されていたとは。

「最低だろ？でもまあ女子の一つ一つにやったら反応して盛り上がる馬鹿な男子もいるんだよ。高校生にもなって」

「うっわサイテー…なに、あんたもそうなの？」

条件反射であんた呼ばわりして聞き返す。

案の定、成瀬は嫌そうな顔をして美影を軽く睨む。

「僕は姉貴が居るし。他にも女兄弟がいるやつは、そういう話には加わらないよ気まずそうにして離れてくよ」

成瀬が心底疲れたため息をつく。

「ゴメン、テキトー言った」

成瀬は「わかったんなら、いいよ」と呟いて、ついでに「内緒にしておいてくれよ」と美影に釘を刺すのも忘れない。

そのあたりのそつのなさは長年女兄弟の相手をして身についたものだろうか。

女子らしい予防線の張り方は男子にしては面倒くさいけれど、それだけしっかりしている、という事でもある。

疑っていたわけではない（怒ってはいた）が、成瀬が深森の事をしつかりと考えて行動してくれていたのにはほっとした。

そんな油断が美影の口を滑らせる。

「そっか、安心したあ」

美影から何の脈絡も無しで出てきた言葉に成瀬と、美影自身も驚いていた。

「安心って、何に？」

怪訝そうな顔をした成瀬に問われて、美影は焦る。

「だって何も考えてない！！」

安心して安心したーなんて口にするってどんだけアホの子だと自分に怒りながら、とりあえず深呼吸をする。

しばらく考えて、美影はやつつかえながら答えた。

「成瀬君が、純粋にユウの事心配してくれてたって分かったから、かな？」

うん、それが一番納得できる、と思って成瀬を見てみると、顔を赤くしてまた頬をかいていた。

そんなにガリガリやっていると傷になるぞと注意したくもなるが、赤

面したまま

「あー……どういたしまして？」

なんて言っている成瀬を見ると、こいつ案外可愛いなー、とか思ったりする。

女子の可愛いは意味不明なんだよ！と男子が叫んでいた事があるが、これは中々レアな成瀬ではないだろうか？大勢の前だったら成瀬はこんな風にならないだろうな、と思う。

そういえば。

「成瀬君、落ち着いて話す時は自分の事”僕”って言うんだね。」

どうよ、とニヤニヤする美影の正面、成瀬はばつが悪そうに頬をかきながら深森と同じ事言うんだな、と笑った。

ああ、そう。ユウモか。うん、お互いそういうところポイントだもんね。

それから取りとめもない事をいくつか話した。

クラスメイトについて、裕子について。

その中で、（そっぴや成瀬とサシで会話するのって、初めてかもー）
と思いついた。

彼女が覚えている限りでは、女子のグループと成瀬がからんだ事はあっても、仲の良い女子は居なかったように見える。

早くから彼と友達になれていれば、裕子と三人で居る時間もあつたかもしれない。

高校生の一年間なんてあつという間に流れてしまう。

もつと”良かった”かもしれない時間を思っつて、美影は”もつたいない”とすら感じた。

もし成瀬とずつと早くから話が出来ていれば。私がまだ文芸部に居た頃に出会っつていれれば。

そうすれば、彼が書きたかつた本当の話が読めたかもしれない。

彼に分厚い本を勧めて、共感させられたかもしれない。
もしかすれば、私が……

「あれ？」

行き過ぎた思考を巻き戻す。

成瀬くんは、分厚い本を？なんだって？

どうかした？と聞いてくる成瀬の声もあまり耳にはいらぬ状態で、
思った事がそのまま口をついた。

「成瀬くんってさ、そういう本も好きなんだ？」

成瀬の顔が、驚いた表情から、警戒するような無表情に変わる。

「……そういう本も、って？」

自分でも話が飛びすぎだ、と美影は思う。

彼女は聞きたかったのはつまり、

「うん、いつも薄い本ばかり読んでるって聞いたから。ちょっと意外だった」

というわけだ。

ああ、と一つ頷いてから成瀬もそれに応じる。

「深森から聞いたのか。意外って言うても、犬塚と初めて話したのは確か本の話だったろ」

「へえ、覚えてるんだ」

「この人とは初めて会った時こんなだったな、っての、よく覚えてるんだよ、俺。逆に顔とか記憶は覚えてても、名前は中々覚えられないんだけど」

クラスメイトの名前なんて、実は全然覚えられないんだ。

そんな風に軽口を混ぜながら答えつつも、成瀬の表情は硬いまま。
目が笑っていない。

美影が裕子に聞いていたのは「彼は話を書くとき長くなって」「本人は短い話を書きたいから」「長い本を薦めても、短い本しか読まない」だった。

美影は「短い話を書きたいから」という理由があることを、裕子から話を聞いている。

だったら、彼が今厚い本を読んでいるのは、理由があるはず。

それは彼女達も興味を持ち、望んでいたものだったから。

美影は聞いてしまう。

彼女の欲しい答えを信じて。

「今度は長い話、書くの？」

「関係ないだろ」

成瀬の答えは単調だった。

その鋭さに美影は軽く竦む。

声の強さもそうだが、何より、入る隙間も無いほどの壁が一瞬で出来てしまったのを感じたからだ。

成瀬が持っている「答え」が、自分達の望んだものとは違うのはいやでもわかる。

だというのにムキになって彼の壁にあるヒビを突つくのをとめられなかった。

美影には、思いあたるものがあつたから。だから頭に浮かんだ瞬間に考えるより先に言葉が飛び出る。

この時、もう少し冷静だったら。

”自分がもし言われたら”と思ひ浮かべていれば。

そうであつたら止められたナイフを投げつける。

「関係なくない。だって私は読んだから。成瀬くんの書いた話を」

それを聞いたときの成瀬の貌を、美影は長い間忘れなかつた。
一瞬で色々な感情がない交ぜになつた表情から美影はそれを読み取れない。

自分が書いたものを、人に読んでもらえた昂揚。

自分の弱いところを、他人に暴かれた羞恥と怒り。

その全てが一気に高まり、引いていく。

そしてマイナスの感情がプラスの感情を完全に追い越した。

美影の中で、まずいと思いつつ、場違いな優越感が生まれてもいた。
こんな一瞬を、表情を成瀬から引き出してやった。

いつも飄々として世渡り上手で優秀なムカツク出来る奴から。

それぞれの心の防波堤を、二人の感情が呑みつくして

「黙れよ」

彼らを止める物は、何も残らなかつた。

「だからってお前に好き勝手言う権利なんてないだろ！」

「へえ、女に対して上からお前なんて呼びつけるなんて、良い度胸

ね。批判を受け止める度胸は無いくせに」

売り言葉に買い言葉で即答する。

「言つのが勝手なら聞くのも勝手だ。聞くべき意見は聞く。

創作したら、全てを受け止めるなんて暴論だ」

だから、もう聞く事はない、と。それを言わない代わりに成瀬は立ち上がり、教室に戻ろうとする。

美影もそれを遮るために足で扉を封じる。

「じゃあ聞かなくていいから、言わせなさいよ」

成瀬が目の前に立っている。

身長差でほとんど顔も見えないが、彼は怒りでひどい顔をしているだろう。

無意識で顔は上げられず、それでも美影は止まらない。

「あなたの書いた話は設定も、キャラクターも、書ききれてなくて

それを書いてるあんた自体が不満なのが読んで分かるの。
なんで書きたい話を書かないの？

同じ人のことを何べんも何べんも書いて、読み手がもっともっとそ
いつの事を好きになれる事だってあるんだって、ユウも言ってたん
でしょ？

あんたが書きたいのが短い話でも、あんたの中にあるのが長いお話
で、それを出し切れないのが苦痛なら長い話を書けばいいじゃない。
なんで？

勢い任せで喋り続けて、それでも言えなかった一言に辿りつく。

一番言いたかった。聞いて欲しかった。ただ一言。

「私は、あんたの！」

見上げて告げようとした言葉は、両肩を抑えられた驚きで止まっ
てしまう。

頭一つ分も違う男にそんな風に押さえつけられれば当然だ。

何か応えて……。

数秒。彼の答えを待つ僅かな時間で、自分がどれだけ恥ずかしい事
を叫んでいたのか思い返し、彼の顔を見上げようとする。

けれど、その動きは顔を彼の胸に押し付けられて止められた。

一瞬驚いたが、それは彼のしたかったことじゃなく、副作用的なも
のだというのには頭上から響く、ゴンという音から分かった。

成瀬は美影の肩を掴んだまま、額を扉に押し付けていた。

そのままの姿勢で一呼吸をおいて成瀬は最後の言葉を吐き出す。

「ごめん、これは俺のわがままなんだけど」

肩をつかまれたまま横に思い切りずらされる。

一瞬見えた成瀬の顔が、何かをこらえるようだったのは、美影の気
のせいだろうか。

「犬塚にだけは、そんなこと言われなくなかった」

言われた意味が分からず、何かを言い返す暇も無かった。美影を横に押しやって成瀬は扉をくぐっていく。

昂ぶりが通り過ぎた今、美影に残されたのは後悔とただただ苦しそうな顔をした成瀬の表情だけだった。

自分の体を押しつけた手は、力づくじゃなくて優しかった。それが分かる頃には、自分のしてしまった事が分かって、

「……なにやってんだろ」

成瀬を傷つけたのに泣いている卑怯な自分が悔しくて、ただ何かを悔やんで立ち竦んでいた。

頭の固い小説家を唸らせるには

放課後。

いつも通りに裕子と下校した美影は、自宅には寄らずに裕子の家を訪れた。

親友の友人を怒らせた直後で、正直に言えば顔を合わせたくない気分ではあったが、不本意にも感情が昂ぶったまま軽く涙してしまつた顔で鉢合わせてしまえば逃げられるわけもなかった。

泣いてしまつた顔は目元を見れば一発でバレる。

顔がむくんでしまうようなガチ泣きをしなかったのが救いだつたが、(校則としてはあたりまえなのだが)化粧道具をろくすっぽ持ち込んでいない美影には、それを隠す手段はなかった。

裕子の部屋にあがる頃には、成瀬との会話については話し終わっていた。

お気に入りのハート型のクッションを胸に抱いて、買ってきたジュースを飲む。

美影が落ち着いたのを見計らつて裕子が投げた言葉は当然優しく慰めるようなものではなかった。

「みいちゃん、言い過ぎ」

そこそこ仲が良い程度の女の子同士なら、同情するような言葉を選ぶだろう。

裕子がそうしなかったのはそれだけ美影の事を近しく、大事に思っているからで。

それが分かるから、美影も素直に謝つた。

「……ごめんなさい」

「まあ言いたい事は分かるよ？」

ボクも言いたかつた事をみいちゃんが全部言ってくれたから、悪役にならなくて良かったなあとも思うし」

「おい、ちよつと待て」

まあまあ、と笑う裕子はいつも通りだ。少なくとも美影からはそう見える。

ストローをくわえたまま、裕子の言葉を待った。

「どつちの言う事も自分勝手に正しくって、ボクが言える事はないと思うの」

だからね、と前置いて裕子は聞く。

「みいちゃんは、どうしたいの？」

「ひょうひちゃいつてのわ、ご、ごめん、ストロー啜えながら話すのはやめるからそのクマは投げないで。そいつ固くて痛いからでも、どうしたいのか私にもわかんないよ？」

んー、と二人でクッションに顔を埋める。どうしたもんかと悩む美影は裕子を見やる。

コウは半分体に顔が埋まつてるが、あれは膝だ。胸部クッションではない。断じてない。

あまりにも考えが浮かばずに余計な事を考えている、と裕子が顔を上げた。

「仲直り、したい？」

「まあ、直すほどの仲でもなかったけどね……」

「ここらこら、途中までは雰囲気よかったんでしょー？拗ねないの、もう」

自分は拗ねているんだろうか。

いや、あそこまで言い過ぎたのは自分のテンションが高かったから。それは認める。

テンションが高かったのは成瀬くんと話していて楽しかったから。それも認める。

でも、あれは私がどうしても言いたかった事だ。

勢い半分だったけれど、本気の言葉だった。

それをはねつけられては、どうしようもないとしか考えられない。

「……はあ」

へこむ。へこみすぎて目の奥のほうから絞られた水が出てきそうだな。なんであんな事言っちゃったんだろう。

美影は顔をクッションに押し付けたままだったが、裕子はその様子をじっと見つめていた。

何度か口を開こうとして、堅く引き締める。

さんざん迷ったあげくに、彼女はそれを聞いた。

「ねえみいちゃん。なんでよりもよっぽとみいちゃんが成瀬君に、そんな事言っちゃったの？」

一瞬、美影の肩が竦む。

裕子が切り込んだのは、美影の一番痛いところだった。

誰よりも一番近くにいるから、裕子にだけは隠せない。

それでも裕子がそこに触れるのは、それでも二人の関係が崩れないとお互いが信じているからだ。

美影も同じように思っている。

痛みこそが信頼の、絆の証だなんて、色んな意味でイタすぎるけど……。

そう感じながらも、続いた言葉は深く刺さった。

「なんで、自分も書けなくて辞めたのに、成瀬君にそんな事言ったの？」

美影が目を合わせられなくても、裕子は話を続ける。

ちゃんと聞いてくれていると分かるから、それで十分だ。

「辞めちゃうのを責める気は全然ないよ。どれだけ本人が楽しくても、それ以上に辞めたり続けられなくなる理由の方が多いのも分かるから」

そして、そのありふれた理由に打ち落とされて、諦めた。

嫌だったわけじゃない。何かに傷つけられたわけでもない。続けた

いとも思っている。

だけど、書くだけで楽しかった一瞬は通り過ぎて、書くことが辛くなっても続けるだけのものが彼女の中にはなかった。

裕子は、今でも気力が戻ってくればまた書いて欲しいと願っている。二人で同じ本を読むことは今でも当たり前だし、裕子が書いたものは美影も読んでくれるのだ。

今でも書くことへの想いは美影の中に残っている。

けれどそれはとても重くて、裕子にも取り出せない。

しかし、それだけ重いものを力任せに振り回したからこそ。

「成瀬君も痛かったんじゃないかな。二人とも、意見を言い合っただけだから、受け止めるも傷つくも勝手だと思っただけだよ」

だから。

だからこそボクが聞きたいのはね、みいちゃん。

「みいちゃんが、それを成瀬君に言えた理由なんだよ。」

自分が絶対に正しいなんて、裕子も考えてはいない。

けれど、書くことを続ければ、批判を受けたり、それから自分を守ったりする事は日常茶飯事だ。

そんなありふれた気持ちの動きに、美影が耐えられるようになったなら。

なったから、成瀬と相対した時に口に出せたのだとしたら。

（みいちゃんが今よりもっとボクの近くに戻ってきてくれるんじゃないかって、期待しちゃうよね）

でも、そこに誘導はしたくない。

無理やり引っ張ってきてても、美影は耐えられないから。

だから、裕子は何も急かさない。

ただ待った。

美影の中に沈んだ想いが、再び浮かび上がった、その理由を。

裕子が自分を待っている事を感じながら、美影は自問した。
なんでだろう。

考える前に喋っていた自覚は美影にもある。

それでも、無意識に怪我をしている部分を庇うように、無意識でも
言えない事はある。

成瀬に吐き出したものは、私が避けて逃げ出したものに凄く近い所
にある。

これは重かったはずだ。痛かったはずだ。

自分が痛くないから言ったわけじゃない。

むしろその逆で、自分が痛かったからこそ、そこを避けてる成瀬も
痛いだろうと思っ**て**ぶつけた言葉だ。

(私は成瀬に何を知ってほしかったんだろう)

思い返してもわからず、顔の向きを変える。

そんな彼女の瞳に、本棚に収められた一冊の本が映りこむ。

そこには色々な本が**つ**まっている。

自分が買った本も、ユウが買った本も。

そして、彼女達**が**書いた本も。

美影が吸い込まれる様に見つめて、目をそらせなくなったのも、そ
の一冊だった。

(文芸誌……)

自分が書いたものを載っている本が、そこにはあった。

開かなくても思い出せる。

私が書いたのは短編だった。

たった数ページの短編で、文芸部員の人**が**書いている続き物の合間
にと挟まれた、書きなぐり。

それは、大層にジャンルわけできるほどの要素もない話だけれど、

私に一番近いお話だった。

文化祭の展示として出したそれは、普段の文芸誌とは違って、感想
を書いてくれる人が多かった。

普通の寄せられる感想が身内のものであったり、真剣ではない意見のかき寄せであったりする中で、文化祭のそれは本当に知らない誰かも読んで、何かを残していくものだった。

（うん、だから、私は……そんな言葉に、負けちゃったんだよね。）

誰が残した言葉かも分からない。

ただただ、痛い言葉は打ち返せずに受け止めるしかなくって。

どこかで期待していた分、痛みをこらえる為に、私は書き続けた。

ルーズリーフに、パソコンに、ノートの端に。

負けたくなくて続けた事の全てが私を疲れさせた。

（それでも、続けてたのは、なんでだっけ？）

そこまで考えたとき、彼女は思い出す。

あまりにも感情があふれた瞬間があった、と。

（ユウの部屋で感想を読んで泣いちゃって）

後で辛くてやめちゃっても、その時続けようと思えたのは、そう、たしか。

「褒めてくれた人が、いたよね」

美影が何を指して言っているのか。裕子にはすぐに分かった。

彼女が初めて作品を載せたのは文化祭の時だった。

いつもより多種多様の感想が集まる機会です学校行事の中という事もあり、作品を褒めてもらえるコメントが多い。

けれど、美影の作品が抽象的な短編だったせいか、褒める感想は抽象的であいまいな「良かったです」という一言で、逆に責める内容は具体的で、痛いものが多かった。

けれどその中でも一人だけ、他とは違うものがあつたことは裕子も覚えてる。

それは読んでいて恥ずかしくなるほど直球で、褒める表現を二重線

で消して書き直しているような有様だった。

けれど、それでいてプラスだけでなくマイナスの意見も書いてあった見知らぬ誰かの言葉は、美影の心の奥深くまでしみこんだ。

「うん、ボクも覚えてる。すみずみまでしっかり見てくれて、すっごいはずかしかったけど」

「まるで、告白されてるみたいで、こんなにも気持ちいいんだね、って。そんなこと言ってたあたし達が恥ずかしいっての」

苦笑しながら、けれどももしっかりと美影は顔を上げて、裕子と目を合わせた。

「理由なんて後付で、成瀬くんに文句言ったときは、考えてなかった事だけど」

美影は続ける、

「私がつつと溜め込んで避けてたものに触れられたのも、きつとあの誰かがいたからだと思う」

自分の内にある何かが消えないように、かみ締めながら口にする。

「あんだけ苦しくて諦めちゃったのに。忘れられないほど、こんなにも優しい言葉だったんだね」

美影の言葉に裕子も頷く。

「たいていの人が何かを書き続けられるのは、それを認めてくれるっていう凄い誰かが、いてくれるからだ、ボクは思うよ」

二人が考えている事は同じだった。

何を感じているのか、誰を思い出しているのか。

その人に、何を感じて欲しいのか。

裕子は黙って美影の言葉を待った。

自分は成瀬の事も分かってしまう。だからこそ、成瀬といくら話しても何も伝えられなかった。

だから、美影が二人の思いを口にする。

「でも、成瀬くんのお話にはそれがなかった。自分から離れたとこ

るばかり見すぎて、だから褒められても認められないし、批判も受け止めようとしてもしない、んだと、思う」

ちよっと自分が偉そうな事を言ってるな、ということに照れを覚えつつ、はつきりと宣言した。

「だけど、成瀬くんにも味わって欲しい。自分が作った、自分に近いものを。自分の中にある何かをそのまま出し尽くして、自分じゃない誰かが認めてくれる事の良さを。だって」

裕子がちゃんと聞いてくれるから。

「だって、だから、また書こうって。書いて成瀬くんに分からせてやるうって。今、そう思えるもの」

言いきって、自分でも驚くほど胸の内が軽くなった。

こんなに。

こんなに簡単に、深くて重くて、大切でやわらかくて暖かくて愛しくて。

それを、私が忘れてしまっていた事が、悲しくて。

でも、これを成瀬にぶつけてやれば、と想像する。

たとえ拒否されても、受け入れられても。

あんな嫌な終わり方で、自分と成瀬の最後にはならないのだから、マシだと思える。

自分のやりたいことが分かって、動こうと思える。

「一緒にがんばろうね、みいちゃん」

私の手を握ってくれる彼女がいるから。

「一緒に、成瀬くんにギャフンと言わせちゃおうか」
ギャフンはどうかなあ。

そうばやきながら、ユウも嫌とは言わなかった。

何がしたいのかを明確にしてからの、二人の動き出しは早かった。彼女達の目標は美影の過激な表現だと

「書きたいものを書いて、成瀬を屈服させる」である。

物騒な発言だが、裕子も否定しなかったので二人の目標はそこで落ち着いた。

何を書くかは焦らないで決めよう、というのが裕子の意見だったが、美影が大量のルーズリーフを使い始める前に、やるべきことを二つ済ませる事を約束した。

一つは、美影が成瀬に謝る事だ。

裕子がにこやかに「意地を張るなら、義理を通してからにしようね」と押し迫り、後に回そうとしていた美影も真っ先に動かざるを得なかった。

屋上で言い争った翌日。

早朝の人もまばらな教室で、成瀬の机の前に立った美影は一言だけ「昨日は、ごめん」

と頭を下げた。

言った事を撤回するつもりはない。

多分それはお互い様で、余計な事を口にすればまた衝突する。

それを成瀬も分かってくれるだろうと言う裕子を信じて、ただ言い過ぎたという意を伝えるために頭を下げた。

結果として裕子の読みは当たり、成瀬も「俺も、悪かった。忘れてくれ」とだけ返して軽く頭を下げた。

最後の忘れてくれだけは聞いてやれない。

けれどお互いに悪かったと思ってくれるのなら、その前の会話は成瀬も楽しく思ってくれたのだろう。

さすがに当人には聞けないが、そう思うことにして美影は下がった。

次にもう一人美影が謝りに行った人物が居る。

文芸部の部長だ。

美影と裕子から見て二つ上の文芸部員は居なかった。

しかるに、現部長は美影が一度だけ文芸誌に短編を載せた去年の文化祭の時と変わっていない。

部長は美影の短編を気に入った一人で、それから何回かの文芸誌に彼女のスペースを空けていたのだが、美影は一度も作品を書き上げられなかった。

他の部員は裕子も含め、創作を続けるのが楽ではない事を知っていた。

だから美影は放置されるままに文芸部を離れた。

美影は他の高校の文芸部がどうやって活動しているかは知らないが、彼女達の部ではちゃんと印刷所で印刷をしていた。

美影の分のスペースを取っておきながら、何も言わずに消えた事。それはつまり迷惑をかけっぱなしにして逃げているのと同じだと、美影は後悔していた。

一旦書くのを諦めてから、再び書き始められなかった事の原因は、この人間関係などいろんなものを含んでいると美影も裕子も感じていた。

だというのに、今また自分の都合で作品を載せてくれと頼むのだ。あつかましい事この上ない。

裕子の仲介を美影はあえて断り、昼休みに三年の教室に顔を出した。

上級生の教室。

それはある意味職員室よりも入りづらい空間だ。

日ごろ接点のある教師に比べると、他学年というのはよっぽど遠い存在だ。

どうやって謝ろうかと美影がドアの前で俯いてモタモタしていると、目の前で開いた扉から現れた人物に声をかけられる。

「……美影君？」

妙に芝居がかつたように艶のある、特徴的な喋り方。

文芸部の部長だった。

顔を上げた美影は間髪入れずに物凄い勢いで頭を下げる。

「……部長、今まで勝手に、ご迷惑をかけて、すいませんでした」
声は大きくないが、はっきりと伝えた。

大きく一つ息を吐いた部長は、美影の頭をぽんぽんと軽くなでる。

「うん、許そう。ほらほら、廊下で頭下げられるのも恥ずかしいから。顔あげてあげて」

いわれるままに顔を上げた美影は続けて「部長にお願いがあります」と言おうとした。

「犬塚、文化祭の締め切りまで、後3週間。仕上げられる？」

美影は一瞬呆然とする。

自分はまだ何も言っていない。

裕子の差し金とか、私がそんなにわかりやすいのかと思ひ浮かんだ想像を捨て去って応えた。

「はい、間に合えます！」

「ん、じゃあ楽しみにしてるから。ページ数の申請とか、細かい事は深森に聞きな。オツケー？」

断られるのも覚悟して”談判”しに来た美影にとっては、あまりにもトントン拍子で話が進んで信じがたい。

だから、聞いてみた。

「部長、怒ってないんですか？私、何度も締め切りやぶって、黙っていなくなったのに……」

「ん、まあ、黙っていなくなったのは良くないね。あたし的にはそこまで気にしなかったけど、部内でも深森がちょっと居づらかったりした時期あったし」

顔をしかめる美影を見て、部長もそれ以上深く言及するのをやめた。

「ただ、そこまでだらしない性格じゃないだろ。」

退部届けを出さなかったのは、スランプみたいなもんだとアタシは思ったし、この世に生まれた小説家と漫画家の9割は自然消滅するもんだとアタシは思ってる。

それで、そこから立ち直れる奴らも星の数ほどいると思ってる。「につこり笑って、部長は美影の頭を抱きしめる。」

女子の中ではダントツに背の高い部長にそうされると、大抵の女子は女子の中でもダントツに破壊力のある胸部主砲に顔を突っ込む事になる。

一瞬悪態を付きそうになっただが、こらえる。

(この人は、変わらないんだな)

こうやって、変わらずに接してくれる人にどう接すればいいのか。少し考えて美影はいつもどおりに悪態をついた。

「相変わらず女好きが直らないんですね。恥ずかしいんでやめてもらえませんか?」

「ん? いやいや、あたしの女が泣いてる所を他の奴に見せるわけにはいかないだろう。ほれ」

密着した状態からさらに胸を反らされる。別の意味で泣きたくなくなってくるな、これ。

誰があなたの女かと文句を言う元気も出ない。

(いつもはすぐ振り払ってたな)

思い出しながらも離れずに、そのまま身を任せる。

半分は罪滅ぼしで、半分は恩返しで。

満足したのか勢いよく美影を引き剥がすと、部長はどこから出したのか文芸誌への投稿申請用紙を手渡して言った。

「ま、文芸部の部長ってことは要するにあたしは編集者やってるよ。うなものでもあるんだ。」

編集は作家を待つのが仕事さね。気にしないで好きなモン書きな。

今年間に合わなくても、来年読みにきてやるから「じゃねっ、と手を振って部長は教室に戻る。」

その気のない美影にとってはその態度は女のくせに女たらしで好感をもてないものだったが。

(来年読みに来てくれる、か)

「うーむ、これは確かにそこらの男子より男らしいかも……」

学校のどの男子よりも彼女が多いとか噂の絶えない部長だが、階段を下りる足取りが軽いのは、彼女の頼りがいのある男らしさ(失礼)のおかげに違いなかった。

作戦会議はいつもと同じく裕子の部屋だった。

部屋の中にはコップとお茶と、そしてノートを広げたらいっぱいになるような小さなテーブルがある。

小さい頃から二人で使ってきたその上には、今は数枚のルーズリーフが置かれていた。

それは1枚だけのものもあれば、多くとも5・6枚で一束になっているものもある。

さて、と裕子は一区切り付けて、その一番枚数の多いものを手に取る。

「ここにみいちゃんの没作品達があつまったわけですが……一番多いのも10枚には行かないね？」

それらは少しずつらして階段状に置かれていて、まとめても普通のノート半分にもならない程度の量しかなかった。

これらは全部で2ヶ月あまりに書いたものだった。

コレだけ見れば、残り3週間で書けるペースなんてたかが知れている。

「ボクはまだ見てないけど、みいちゃんの目標枚数は、これと同じくらいなんだよね？」

美影は黙って頷く。

自分の書いてきたペースと、目標の間は酷く離れている。

部長は来年でも読んでくれるといってくれたが、彼を来年まで待たせるわけには行かない。

「目標枚数はまだはつきりと見えてないけど、でも書きたいのが短編じゃないのはハッキリしてる」

そう。裕子は美影が短編を書くと思っていたが、美影は書かないと言いつつ切った。

物語として筋の通った中編以上の何かを書く。

それは実際に筆を動かしてみなければ見通しが立たない作業だ。

「だけど、やり方はあるかなあ」

裕子は机の上の卓上カレンダーを手にとって、残りの3週間を均等に5分割した。

それぞれの期間に一文字ずつ書き込んでいく。

起承転結。

「その期間にそれぞれ書き上げるってこと？」

「あくまで目標だけど、分かりやすいかなあって。部長は起承転結の順番で書いていたりもするけれど、まずはオーソドックスにね」

でもそれって、逆に言えばそれぞれ4日で書き上げなきゃいけないって事だよな。

思い、けれども口には出さずに頷く。

今の自分はそれをやらなければいけないのだ。

だったら分かっている事は言わなくていい。

最後に気になったことを聞いてみる。

「5個目の期間と、最後の一日は何をするの？」

予想通りの返事に裕子がにっこり笑って書いたのは「秘密」だ。

「まあ、楽しみにしてもらおうとして、とりあえず始めようか？」
嫌な予感がする。

というか、最近幼馴染が怖い笑顔の使い方を覚えている気がしてならない。

そう思いはするものの、協力してもらっておいて文句は言えない。ため息一つで納得して、美影はペンを手に取った。

こうして、文化祭までの一ヶ月。
鬼編集の下での執筆が始まった。

はじまりの終わりのはじまり

動き始めてからの日々は、思い返してみても特に言うべき事は無いと美影は思っている。

あえて言うなら、部長は自分の事を編集者と言っていたが、裕子こそが美影にとつての編集者であり、ただ待ってくれたとはどんなに事実を捻じ曲げても言えないほどスパルタ風で付き合ってくれたというぐらいだろう。

そしてそれ以上に、そこまで付き合ってくれる親友をありがたいと痛感した一ヶ月だったとも思っていた。

パソコンに打ち込むのではなく、ノートに書き出すタイプの美影には授業の時間なども関係なく、いつでもノートを開いて思い付きをメモに取り、授業そっこのけで物語を書き綴った。

放課後、美影が常に先を書き続けている間に裕子は毎日それを校正しつつ、パソコンに打ち込んでいく。

裕子は自分の分を書き上げ言ってくれたが、3週間で書き上げられたのは裕子の協力あってこそだ。

だからこそ手を抜かず書いて書いて、書き上げたという自負が、美影にはあった。

文化祭当日。

文芸部にあてられた一室の準備を終えた美影は小さく呟く。

部屋は大きいパネルを使って蛇行するように作られている。

それぞれの展示と一緒に誰もが名前を聞いた事のあるような名作をあらずじで挟んでいるのは現部長が始めた事だ。

曰く、

「吾輩は猫である」を読んだ事のある学生って、思ったより少ないんだよね。それこそ1クラスに1人か2人くらいしかないんだ。アリスとか、ホームズとか、そういったキャッチーな代名詞で人を

寄せ付けよう」
とのことだ。

実際、親の世代やその上の世代はそういった「誰もが」読んだ本を、今の子供世代はまったく言っていないほど読まない。
まったくもって部長の慧眼には恐れ入る。

そしてそれらの合間に部員の作品を展示し、一緒に文芸誌も置いておく。

これもまた部長の思惑通りにだった。

部長がこれを始めた去年は例年の倍以上の文芸誌を持ち帰ってもらった。

そして例年以上の感想を集めた事が、初心だった美影には痛すぎるほどの棘にもなったのだ。

(でも、今年は……)

自分のパネルの前に立つ。

あらずじと一緒に置かれた文芸誌。

部員は作業が終わった際に、部長から初めて文芸誌を受け取っていた。

「それまでは部員同士でも互いの作品は見せない」という部長ルールに、美影はは感謝している。

当日まで成瀬が私の作品に触れることが無かったからだ。

自分の書いた作品を、狙った誰かに読んでもらう。

それはこんなにも苦しくて、それでいて楽しみで。

自分が始めて作品を載せた時のようできて、また違った不思議な興奮が体を包んでいる。

洋書の頭によくある、宛名を載せた物語の作者も、こんな気持ちだったのだろうか。

顔も知らぬ作者達の心を思っていると、後ろから抱きすくめられる。

「ぶぶ部長!？」

「ん、いい反応だ。まあそう嫌がらないで欲しいなあ。君の要望

を叶えてやったんだから」

今にも「セクハラですよっ」と叫びたかった美影だが、黙っていいようにされる。

部長には、成瀬に手渡す文芸誌にカードを挟んでもらった。

マンガちつくな呼び出しだが、時は文化祭で所属は文芸部だ。

成瀬もバカにせずに乗って来てくれるだろう。というか乗ってもらえすらしなかったら困る。

乗ってもらえなかったらどうしようという、隠していた不安。

意図せずつこうとしたため息は、部長に手で口をふさがれて漏れる事は無かった。

「美影君の作品は私的には”赤点でもあり満点”だ。自信を持っていい」

もしかしてこの人は、自分のパネルの前に立っていた私を見て励まそうとしてくれたのだろうか。

ハツとした美影は足に伸びてきていた手を払いのけて、部長から離れる。

「いろいろとありがとうございます、部長」

「つれないね、美影君は。ま、君には裕子君がいるから致し方ないが……」

「……部長的にそのカップリングはありなんですか」

「大アリだ。」

真剣な顔で頷く彼女を見て、今度は本当にため息をつく。

美影とは正反対に満足そうな顔をしながら部長は笑う。

「ふふ、まあ私としては君が昼までの担当を守ってくれれば、それでいい。後は精々頑張れ」

気取り屋な部長らしい言葉遣いに私もつられて笑う。

成瀬をギャフンといわせるまで、あと少しだった。

美影は部長に仕込んでもらったカードに「屋上。感想を、聞かせて」としか書かなかった。

署名代わりに、私の作品の所に挟んで貰ったが伝わっただろうか。不安に思いながら、彼女は椅子に座ってじっと教室の番をしていた。時計を見ると交代の時間まであと五分ほどだ。

次に教室の番をする裕子は先ほど一旦戻ってきて、飲み物を買っている。

裕子が戻ってきたら、後は自由行動だ。

今日の最大の目標、「成瀬にギャフンといわせてやる」を達成しなければならぬ。

やきもきしながら時計を睨みつけると、裕子が戻ってきた。

「おまたせ。ごめんね、混んでたから」

言いながら、ジュースの缶を二つ手渡してくる。一つは美影のもので、もう一つは「成瀬くんに、よろしくね」と渡される。

「……ま、敵に塩を送ってやるつても粋な計らいよね」

「あはは、敵じゃないでしょー、まったくもう」

ひねくれた返事の裏で緊張しているのを悟った裕子は笑ってしまう。だがそんな反応も含めて裕子は、「みいちゃんらしいなあ」と言っていると、後は何も言わなかった。

美影は部誌を一冊手に取って立ち上がった。

「じゃ、いってくんね」

「いってらっしゃい」

親友が部屋を出て行く。

裕子が見上げた立ち入り禁止の屋上には、縁に座って足をぶらつかせている男子生徒が待っていた。

屋上に出る扉には、以前と同じように南京錠がぶら下がっていた。扉を静かに、少しだけ開ける。

こちらに背を向けたままの成瀬は振り向かず反応する。

「三番お疲れ様ほっはんおふはれはま」

「……食べながら話すの、行儀悪いよ」

成瀬は食べ終えた後の容器を袋にしまう。けれど美影を振り向きはしなかった。

彼の左にはたこ焼きやクレープなど、生徒が作っているものが山のようになっている。

二人がどちらともなく黙りこんでいたが先に口を開いたのは成瀬だった。

膝の上で開いていた文芸部の部誌を脇に置くと、

「とりあえず座りなよ」

と、自分の右側をぼんぼんと叩いた。

言われるがまま、本を挟んで右隣に座る。

部誌を手にとってしおりの位置を開く。美影の作品の終わるページだった。

ここで「読んだ？」なんて聞くだけ無粋だ。

どう考えても読まれた。いや、読んでくれた。

少なくとも途中で投げ出さずに最後まで読んでくれた事に感謝しつつ、いまずくに感想を聞きたくなった。

私の小説はどうだった。

面白かったの。

つまらなかつたの。

褒めてくれるところはあるだろうか、どこかけなされてしまっただろうか。

あその書き方は大分凝ったんだけど、気付いてくれただろうか。そして、私の言いたい事は伝わっただろうか。伝えられるだろうか。

(というか、小説がどう思われるかが心配すぎて、実際に何を話すかまったく考えてなかった!!)

人を呼び出しておいて何から聞いたらいいのか分からないなんて…。

美影が自分の頭の足りなさに恨めしそうに唸っていると、成瀬が小さく笑った。

「なに!？」

「いや、そんなハリネズミみたいに警戒しないで。とりあえずそのジュース、飲まないならコレと交換しない？」

成瀬はこちらにクレールを差し出しながら、手に持ったままのジュースを指差す。

「あ、ご、ごめん。ずっと持ってたから温くなったかも……あと、これはユウからのだから」

「うん、深森に感謝しないと。飲み物だけは委員会が出してるから、もらえなくってさ」

ジュースを受け取った成瀬はそのまま缶を開け、一息にほとんどを飲み干す。

彼の向こう側を除いてみれば、びっくりするほどの容器が袋に詰まっていた。

「それ全部もらいものなの？で、全部食べたの？」

「もちろん。全部手伝ったところの奴。サッカー部の”お好み焼き”とかバレー部の”水着カフェ”も手伝いに行ったんだが、そこらは断ったな」

その出し物、両方とも今年の生徒会から目を付けられている出し物ワースト1位と2位じゃなかったか。

「それにしたって、よく食べれたね、その量」

男子はいつもバカみたいな量を弁当を食べてると思っていたが、目

の前のコレは更に凄い。
男子なら普通だよと成瀬は言うけれど、どうなんだろう。あ、クレ
ーブおいしい。

しばらくを雑談をして、美影はようやく自然に会話が出来ている事
に気付いた。

成瀬は自分と”話して”くれる。
気を使わせすぎて申し訳ないが、少し自信がついた。

「読んだよ」

突然の言葉についたばかりの自信が凍りつく。

ページをめくる成瀬の手に集中して、顔をあげられない。

彼女の書いた作品に辿り着くと、そこには赤いペンで色々と書き込
まれていた。

批判や評論家気取りの添削かと一瞬ムツとして身構える。

けれどそれらはよくよく見てみれば彼が気に入った部分に線を引い
たり、似たような表現を並べて書いてあったりする。

それは成瀬が本を読むときのスタイルだ。

気付いてしまえば、成瀬がどれだけ真剣に文字を追っていたのかが
分かる。

最後のページまでたどり着くと、彼はそっと本を閉じた。

「……？」

意外そうな顔をした美影には構わず、成瀬は部誌を美影に手渡す。

「あとで読んで欲しいから、書いた。今は読まないで」

黙って頷くと「ありがとう」と言ってお成瀬は立ち上がるようにする。

(これで、終わりにするつもり)

成瀬が去ってしまう前に、美影は彼の袖を掴んでまくしたてる。

「私が部長に頼んではさんでもらったカードには、感想を聞かせろ、
って書いたんだけど。で？」

「で、って……。ちゃんと言われた通り、感想はそこに入ってるか

ら。向こうに戻って読めば？」

成瀬はここから見える文芸部の展示室を指差した。

美影は首を横に振って、しっかりと要求する。

「感想を読ませるとは書いてない。だから、今ここで話して」

一瞬言葉につまった成瀬は、すこし迷ってから座りなおす。

「……また、前みたいに怒らないなら」

ちよつとグサツときたが美影は「わかった」と答えた。

成瀬は屋上に寝転んで空を見上げつつ、やがて低い声で話し始めた。

「60点」

「話の作り自体はオーソドックスなものだけど、悪くないと思う。

犬塚が始めて書いた長編ならなおさら」

「だけど、伏線とかトリックとかそういう物がなくて、長い短編を
読んでもみたいだった。深森がオススメしてきた本みたいに伏線が
あるのが好みなら、犬塚が書いたそういう話を読んでみたかったな」

「俺ならヒロインが初めて会話する前に何か一本話を打ち込んでお
く。みえみえでもいいから、先に何かあるんだろうと思わせる工夫
が必要だろ」

その後も成瀬は頭から最後まで色んな事を話し続けた。

美影にとつて、それは褒められて嬉しいものもあれば、指摘が心苦
しいものもあった。

（でも、そうじゃないんだよ。成瀬くん）

心の中でそう思いながら、美影は成瀬の話が終わったら直接言おう
と思っていた。

だが、最後に彼が呟いた言葉が、彼女の心に大きく響いた。

「これだったら、前みたいな短編を載せた方が良かったんじゃない
か。あれは俺には」

「ちよつと待て」

何故知ってる。

「私の、読んだ事あるの？」

あの短編の事を、何故知っているのか。

じつと成瀬の目を見つめ続けた。

「読んだよ。文化祭で展示してたんだし、読んでたつておかしくないだろう」

「まあ、そうなんだけど」

迂闊だった、と美影は反省する。

今回書いた長編は、ただそれだけで読んで欲しかった作品だ。

それは無意識での前提だったが、美影からすると「以前の短編は読まれていない」ことが必要だった。

だから、思う。

「なあ、犬塚。なんでだ？」

その先を言わないで、と。

「なんでわざわざ長編書いたんだ？」

一年前。

私はあそこに一ページの中に自分の全部を詰め込んだ。

「犬塚の話は、凄く良かった。正直、短編のほうに向いてると思う。」

あれから、一年。

私は十数ページに思いを詰め込んだ。

この二つは違うものだ。

出来の良し悪しじゃないものの為に書いた。

それは作者の独りよがりだと、成瀬は思うだろう。

それを、読む側が受け取らなくてもいいと思うかもしれない。

だけど、成瀬に伝えなくちゃ。

だから、彼女は成瀬の方を振り向いて。
精一杯、心を込めて、言った。

「違う」、と。

「あの短編は、私が私に向かって書いた物だから」

だから違うんだ。だってこの作品は、

「成瀬に気付いて欲しくて、書いた物だから、比べないで」
同じ作者の作品だと思って比べないで。

これは私の勝手だけど、一人のために書いた作品だから。

「成瀬の話と、私の話を、比べて」

届いて欲しいと、強く願った。

書きたいものを書いた私の心と、書きたいものを書けない成瀬の心を。

私はそれを小説にした。

成瀬に言われたくない言葉を、言われる。

成瀬に伝えたい言葉を、言わせる。

ねえ、これが私の伝えたかった事なんだよ。

伝えたくて、心の中の書き出したいものを全部カタチにしたお話なんだよ。

この書き方が60点でも0点でも私は構わない。

成瀬が何を思っただけでムリヤリ話を続けるのか、私は知らないけれど。
届いて。

「あなたの中をカタチにしたものを、無理に形を変えたお話なんかより、私のが、良いもの……！」

最後の方は自分でも情けないと思うくらいに涙声だった。

自分が無茶苦茶を言っているのは分かる。

小説に評価の高低はあっても、価値の優劣なんてない。

それでも押し付けがましくそんなものを読ませて、言葉で叩きつけ

て、それでいて前回と同じように泣くなんて卑怯だ。そう思いながらも美影は涙を止められずに俯いた。

そのまま美影が落ち着くまでどれくらい経っただろう。

お互い一言も口を開かなかった。

成瀬が何も言ってくれないことが、とてもさみしかった。

怒鳴られても、冷静に批判されてもいいと思っていた。

無視をされるのは、キツすぎる。

冷静になって美影が考えたのは、どうやってこの場をさるうかということだった。

泣きながら出て行けばいいものを、呼吸が落ち着く位にまでなってしまうばタイミングも何もない。

どうしようもなくなって、何も考えずにおそるおそる成瀬の顔をのぞきこむ。

「……なにやってんの」

大の字になって空を見ていた。視線はこちらに向けず空を見たまま。けれどももおかしいと感じて、思わず美影は指摘した。

「なんで顔まっかなの？」

成瀬の顔は誰がどうみても赤くなっていて、美影が話しかけても彼女の方を見ようとはしなかった。

我慢できなくなった彼女が口を開こうとしたタイミングで、成瀬は言いづらそうに口を開いた。

「ごめん、勘違いしてた」

「何を？」

「いや、だからさ。わかるだろ。まともに話したのがケンカした時の一回だけなのに、いきなりお互いが登場人物の恋愛小説もどきを渡さ」

「ちょっと待て」

本日2度目の衝撃だ。

「これのどこが恋愛小説なのよ!？」

あ、今凄い大声出た。

自分で引いてしまうくらいに怒鳴りつけてしまった事に軽く後悔しつつも、追及の手は止めない。

「意思疎通できてなかったお互いが、理解しあうだけの学園モノでしょ!？」

「いや、いやいやいや、お前だって、これ、俺の描写ほとんどそのままじゃねえか!仲直りだけだったらこの前謝ってそれで終わりだろう。その上でこれ渡してきて文化祭で返事聞かせてって、何事だと思っただろう!」

「返事じゃない!感想!!全く気にしてないわけじゃないけど、アంతに長編を書くやる気を出させるために書いただけだったの!」
成瀬がなんだそりやと二度呟くのが聞こえたが無視する。

今思えば、その通りだ。

これが恋愛小説だったとしたら、かなりブツ飛んでる。

しかも超のつくストーリーカー気質じゃないか私。

(いやいや、日ごろから周りを観察してるのは物書きの嗜み……だよね?)

内心ですら疑問符付きだったが、美影は言い切ったまま成瀬を見下ろす。

我ながら沸点低い凝固点も高いわ、泣けてくる。

だけど、この会話の中でも成瀬は一度も自分が長編を書くことには触れてこない。

「なんで、そうまでして短編を書くことすんのよ」

これを聞いたらもう戻れない。前々からそう思っていたことを美影は聞いた。

成瀬は逃げるのでもなく、言い訳を考えるのでもなく、どう言おうか迷っていた。

そして成瀬は「今までの会話の流れ、気にするなよ」と一言おいてから話始めた。

「去年、犬塚の書いた話を読んで凄く気に入った。

俺はそれまで長い話ばかりを書いてて、ちよつと短文的な作品をこばかにしてた。

だけどアレを読んで始めて思ったんだ。

俺には、これは書けない。『負けた』って」

成瀬が、意図せず使った言葉が耳に残る。

『負けた』。

今日、私が彼に思わせたかったものを、彼は既に感じていた。

感動と衝撃の大きさに返事が出来ない美影をおいて、成瀬は話し続ける。

「犬塚がアレを中庭の石碑の裏に座って書いてたの、実は見つけた事がある。そのときは何書いてるんだろうと思ったんだけど、後から気付いた。

あんなに自分の事とか、見てるものや感じてる事や、考えてる事を文章に表せるのが素直に凄いと思ったんだよ。

俺はいつだって周りくどく説明文を書いてて、だから、俺もそういうのが書けるようになりたいと思ったんだ」

諦めたような笑みを顔に浮かべて、成瀬は体を起こす。

その表情が美影は気になるが、問う前に答えは成瀬から出てくる。

「だけど、そう思っって一年の間に何個か書いたけど。犬塚の目に付くようなものは書けなかったんだよな、つまり。それが少しばかり残念だ。」

申し訳ないことをしたと最初に思い、すぐに上から目線でそんなことを思っっている自分が恥ずかしくなった。

お互い思っっていた方向は逆だったけれど、恥ずかしさと同時に少し

だけ美影は嬉しくなる。

方向は違っても、方法は同じだった。

「お互いがすれ違って、追い越したり追い続けたりしてただけでとつくに通じてたんだね」

素直な感情をそのまま言葉に出してしまふ。

たしかに、これは話す前にじっくり考え込む成瀬にはとうていできない私らしさなんだろう。

「恥ずかしい事言ふなよ。分かってるんだから」

成瀬も視線をはずして顔を隠すが、自分が恥ずかしい事を言っているとは気付かない。

(すごい、遠回りをしたけど……目標は達成かな)

嬉しさに我を忘れそうだった美影がハツと声を出して思い出す。

成瀬の顔に手を当てムリヤリ自分のほうに向けさせる。

「でさ、今度はちゃんとした成瀬の小説、書き上げるんだよね？」

そうだ。そう思わせなければ意味がない。

こんだけ恥ずかしい思いをしたんだぞ、という眼力が通じたのか、成瀬はため息を一つついてうなずいた。

「わかった。」また”俺の負けだよ犬塚。俺はやりたいように書きたいだけ書いてみるよ。だけど”

よっ、と勢いをつけて成瀬が立ち上がる。

まっすぐ立たず、体を斜に傾けて美影と同じ視線にして彼は言った。

「俺が書いている間は、犬塚も好きなものを、だけど書き続ける。前みたいに一回だけ書いて幽霊部員に戻るなら、俺だってお前には読ませないからな」

最後に付け加えた言い訳がどうでも良すぎて笑ってしまふ。

そうだね、ここにユウも加わって、三人が書きたいものを書いて、好きなだけお互いを読みあつて。

私達が逃がした一年間と同じ時間を、これからは三人で楽しめるん

だ。

「約束する。だから、しっかり書いてよ」

「そつちこそ」

お互いが一緒に目線を送るのは一階だ。

時計を見ればそろそろ交代から小一時間が経っている。裕子の当番が終っているはずだ。

「いこつか」

「そうだな」

成瀬がゴミを下げた袋を片手に持って、私は片手に部誌を持って、重い鉄扉をあける。

ふと、後ろで南京錠を締める成瀬が声をかける。

「その部誌さ、もっかい色々書き直すから一度戻してくれない？」

「うん、いい……よ……？」

自然な申し出にそのまま頷きそうになったが、違和感に思い当たって振返る。

鍵をかけた成瀬も振返り、美影に向かって空いた手を向ける。

(……………)

「ねえ成瀬君。私に返事書いてくれたの直すんだよね？」

「成瀬でいいよ、深森もそう呼んでる。そうだけど何か？」

にやり、と邪悪な効果音が入りそうな笑みを美影が浮かべる。

「ふうん。感想じゃなくて返事を書いてくれたんだ。そうかそうか」

あわてて手を伸ばす成瀬から逃げるように部誌を引っ込めて美影は階段を飛ぶように下りていく。

「あ、ちよ、ちよっと！読むな！読むなよ！？」

あわてたように追いかけてくる成瀬の声を背中に受けながら、美影は前方から歩いてくる裕子を見つける。

美影達を見て一瞬立ち止まった裕子も、嬉しそうに笑いながら二人に向かって駆け出す。

3人の小説家の、幸せな時間が刻まれはじめた瞬間だった。

DAY BY DAY

後ろから駆けて来る足音が真後ろで止まり、自分に用があるのだと分かって少女は振り向いた。

「あ、あの！先輩……今お時間よろしいでしょうか？」

声をかけてきたのは部活の後輩だった。

その子は少女の連れの少年を申し訳なさそうに見上げながら、少女と少年を交互に見る。

少女は後輩の考えが分かり、少年にちょっと待ってて、と告げると後輩と廊下の角を曲がった。

渡り廊下を封鎖されたそこは、文化祭の最中とは思えないほど静かだった。

「コレ、読んだんですけど……これノンフィクションなんですか！？」

後輩が出してきたのは部活で出している文芸誌だ。

しかし表紙にかかれた年度が昨年だったことで、何を聞きに来たのか、大体のところを察する。

「去年私が書いた話が実話かどうか聞きたいの？」

興奮しているのか、必死に首を上下に振る様子はなチワワのようで可愛かった。

「だって、この二人、まるっきり先輩達じゃないですか！2年の人に聞いてみたら去年卒業したOGの方に、これに出てくる部長そっくりな部長も居たみたいだし……」

どうなんですか？と向けられた目は「実話だと言ってくれ」という思いが全く隠せていない。

自分が今苦笑しているのは、この子にはどう見えているんだろうと少女は考える。

答えはある。

だけどそれはイエスノーの二択で断言できるものではない。だから、これが答え方としては正しいなと思った事を口にする。

「フィクションかどうかで評価が変わってしまつたら悲しいな。でも作品の価値は変わらずに受け取ってほしい。」

その話はそこでエンディングだけど、続きは好きに想像するといよいよ」

煙に巻くようにはつきりと答えは告げず、じゃね、と手を振って少女は背を向けた。

気付かぬうちにニヤニヤと顔が歪みだす。

さあ、楽しもう。

じゃないとカタチにした私たちに嘘をついたことになる。

人ごみの廊下に待たされた少年は不満顔だ。

「なんだつたんだ？」

「んー、なんでもなーい。」

去年の私が夢見たように。

来年の私が楽しかったと思えるように。

全力で、楽しんでやるんだ。

少年の手を引いて少女は歩き出した。

DAY BY DAY (後書き)

これにて、完結です。

私の中では初投稿、初女性主人公作品、などなど、私にとって価値の変わらぬものが書けたと思います。

評価の高低も、読んでくれる方がいたのならそれは意識を変えるために受け取りたく思います。

ご精読、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2131t/>

ぶあつい本が読みたいっ

2011年7月30日23時03分発行